GREEN COMMUNITY COLLEGE

NEWS きのくに

Vol.24【1】

p1 紀南のまちづくりとNPO 志場久起
p2 地域の災害史の共有により減災を目指す 上野山巳喜彦
p3 私が北山村を選んだわけ 荒井恵理
p4 西行法師生誕九百年に寄せて 花輪竹峯
p5 流域に暮らす人びとの減災の思想 鈴木裕範
p6 きのくに活性化センター活動経過報告

きのくに活性化センター 発行責任者／榎本長治 発行日／2018年6月 〒646-0011和歌山県田辺市新庄町3353-9 BIG・U内 TEL&FAX0739-26-9670 http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

紀南のまちづくりとNPO

特定非営利活動法人わかやまNPOセンター副理事長
和歌山県NPOサポートセンター 志場久起

人口減少や少子高齢化の進行等の要因から、行政だけが公共的サービスを提供するということが徐々に困難になってきていること、そして住民が自主的に公共的サービスを提供するNPOの存在価値は相対的に高くなっていることは紀南地域でも同じである。では、紀南地域におけるNPOの現状はどうだろうか。

本稿執筆時点(2018年3月上旬)で、紀南地方に主たる事務所を構える和歌山県認証のNPO法人は80を超えているほか、田辺市市民活動センターと新宮市ボランティア・市民活動センターに利用団体登録を行っているNPOは合わせて200を超えていることから、紀南には少なくとも300団体程度のNPOが存在することがうかがえる。

しかし、その規模はまちまちである。わかやまNPOセンターが毎年実施しているNPO法人の経済規模の調査、そして一昨年度の「地域づくり団体実態調査」(和歌山県委託事業)の結果から、1,000万円以上といった大きな収入がある団体もある反面、ほとんど収入がないという団体も少なくないことがわかっている。そして、多くの団体が「ヒト」「モノ」「カネ」といったNPOの運営に必要な資源の不足に悩んでいるという調査結果が出ている。

非常食の試食会

なかでも「後継者がいない」という問題は深刻である。NPOに携わってきたメンバーには、余暇や家事の合間に活動に取り組んでいたという人が少なくない。しかし共働き世帯が増え、経済的余力にも乏しいなか、現在では活動に時間を割く余裕がないという若い世代の意見もみられる。

また、これまで地縁組織の結束力が比較的強いとみられてきた紀南地方でさえ、町内会や消防団、PTAなどといった組織の加入率・参加率の低下が課題として叫ばれ始めている。つまりNPOどころか生活基盤となる草の根の地域づくりすらままならない状況が始まっている。手を打つなら、まだ余力のある今しかない。

筆者は実験的に、田辺市中心部でNPOと地縁組織がコラボレーションする機会の提供を提案している。人手不足に悩む各種団体が無理に単体で事業を実施するのではなく、複数の組織が連携することで、事業の効果を高めつつ共通事務の削減につながることが期待できる。

これまで脈々と受け継がれてきた、地域の運営ノウハウや手法は簡単に変えることはできない。しかし、このままの少子高齢化・人口減少が続けば、遠くない将来にのっぴきならない事態が起こりうる、という危機感も地域で共有しなければならない。そのうえで、紀南にも少なからず存在するNPOの力も活用しながら、地域が目指す共通の目標に向かってともに歩んでいく、そんな取り組みを今後進めていきたい。

しんぐう元気フェスタ

地域の災害史の共有により減災を目指す

減災カフェ主宰
上野山巳喜彦

減災カフェを始めて

私は、新宮市において町なかの喫茶店を会場とした小規模の災害対策講座「減災カフェ」を主宰しています。

「過去に学び、現在を点検し、未来に備える」をモットーに、地域の災害の歴史を学び、かつ災害時に被害を軽減することに実際に役に立つ具体的な知識「実用減災学」を共有することが目的です。

災害対策は、地域の災害の歴史や特性を踏まえた上で行わないと場当たり的であったり、的外れになったりするおそれがあります。また、災害を他人事ではなく、自分事としてとらえてもらうためには、自分の住む地域の災害の歴史を共有することが欠かせません。

しかし、その知識を得ようとしても、新宮市においては地域に特化した災害の歴史や特性を体系的に学ぶ機会や資料が身近にほとんどないのが実情でした(これは新宮市のみならず、全国的にもほぼ同じ傾向のようです)。それ故、その知識を気楽な雰囲気の中で学べる場をつくる必要性を強く感じていました。そこで新宮市役所退職を機に、市街地にある喫茶店を借り、月1回定例的に「減災カフェ」を始めました。

また、今まで調査・収集した新宮の①災害の歴史、②大きな被害をもたらした災害の解説、③被災者の体験を3本の柱とした資料集『新宮市災害史誌』を編纂し、2017年に自費出版、市役所や消防・警察・国・県などの防災機関並びに近隣の公立図書館や高校などに寄贈しました。これは「減災カフェ」で地元の災害の歴史や特性を話すだけでは、取り組みが一過性になるのではという思いからです。

平成23年 台風12号『紀伊半島大水害豪雨』

そして今

3年前の2015年に始めたミニミニ講座の「減災カフェ」ですが、今ではいい手ごたえを感じています。講座に参加された方から依頼を受け、町内会や各種団体へ出向く「出張減災カフェ」が少しずつ増えてきました。蒔いた種が芽吹き始めた感があります。今後すくすく育って欲しいものだと願っています。

そして今、将来、巨大地震に対峙するための防災・減災力を一番必要とする世代、すなわち中学生を含む若い世代に、地元の災害の歴史とその特性を伝える必要性を痛切に感じています。

新宮市災害史誌

そしてこれから

災害史を編纂する中で大事なことに気づきました。それは「先人は実に深刻な災害に何度も遭遇しながらも必死の努力で乗り越えてきた」という事実です。

この事実を伝え、先人の努力・たくましさを学び、受け継ぎ、さらには最新の科学的知見と技術を取り入れ、次の巨大災害に対して「乗り越えよう・乗り越えられる・乗り越えねばならない」という思いをより多くの人々と共有したいと思います。

そして地域の力を結集して被害を最小限に抑えこむ「減災」の準備を進めて、次の世代にバトンを渡したいものです。

巨大災害の想定に対する「もう、だめ、無理、何をしても無駄」という極端な悲観論や「その時はその時、なんとかなるで、大丈夫やろ」という根拠なき楽観論を排し、地域の災害を分析して教訓を読み取り、かつそれを絶対的なものとせず、社会変化や地勢の変化も加味した上で、次の巨大災害に対して有効性の高い事前対策を講じるために「減災カフェ」や『新宮市災害史誌』がその一助となることを願い、この取り組みを継続していきたいと思っています。

減災カフェ

シリーズ　地域をつくる女性たち⑯

私が北山村を選んだわけ

北山村役場
荒井恵理

軽い気持ちで出会った北山村

人口130万人の埼玉県さいたま市で生まれ育った私が、人口448人の北山村に導かれたきっかけは、国土交通省の道の駅連絡協議会主催の「道の駅インターンシップ」に参加したことです。300か所以上あった候補の中で、北山村の道の駅も含まれていて、北山村は「筏下りの語り部」を活動目的として挙げていました。ほかの道の駅が特産品販売など似たり寄ったりな活動内容だったという印象もあって、違うニオイのする北山村に行ってみようとほんの軽い気持ちで応募しました。

増大する不安な気持ち

和歌山県なら、勝手に紀北のほうだろうなんて思ったのもつかの間、グーグルマップが北山村だと指差したのは三重と奈良の間。目が点になりました。どんな場所へ行くのだろうか、わくわくと不安な気持ちを抱えたまま、いざ実習となりました。その不安は拭い去られることはなく、高速バスを降りて北山村へ向かう道中は、通ったことのないほど細い山道。「本当にこの先に村があるのか、人が住んでいるのか。」私の不安はさらに増大することとなりました。さらに、実習中は自炊。一人暮らしすらしたことがなかった私が本当に20日間ここで暮らしていけるのか、両親も非常に心配していたと思います。

部署を超えて協力しながら、北山村のPR。東京で村の名物じゃばらバーガーを販売し、無事に完売！

がらりと崩れた過疎のイメージ

生活の不安、過疎地にいる不安は、気が付いたらさっとどこかへ飛んで行ってしまいました。少ない人数だからみんなで何でもやろうとする姿、夏祭りの準備に走る若い村の人たち、小さな赤ちゃんを連れた家族連れなどを見たり、たくさんの人がよそ者の私にも気さくに話しかけてくれたり。自分の中にあった「過疎」という概念はあっという間に覆って、北山村の活気を目の当たりにしました。

そしてたくさんのお客さんが筏下りを楽しみに来る姿を見て、北山村はたくさんの人に愛されていることを実感し、北山村と北山村に住む皆さんをうらやましく思いました。今までこんな気持ちを抱いたことはなく、何とも言えない不思議で新しい気持ちを抱いて実習を終えることになりました。

観光筏下りと北山村ならではの険しい峡谷風景。
毎年6000人ほどのお客さんが筏下りを楽しみに遊びに来てくれます。

自分でつなぎ続けた北山村とのご縁

北山村での実習を終えて大学に帰ってきたときに、「これも何かの縁だ。せっかくだからつなげよう！」と思い、ひとりで北山村まで通うようになりました。そして、北山村が好きだと周りに言いふらしたり、卒業論文を北山村を舞台に執筆したりするうちに、役場の採用試験があると知って、ついに就職までしてしまいました。この新卒×移住という選択肢が合っていたのか間違っていたのかは1年たった今もわかりませんが、私はここで働き、暮らせることを幸せだと感じています。もう少し働いてから…と移住を先延ばしにしていたら、もう二度とチャンスが来なかったのかもしれないと今になって思います。

北山村への思い

現在北山村で暮らすなかで、北山村は「みんなで頑張る村」だということを強く感じています。小さな村だからこそ、人が集まって知恵を集めて行動していくことが重要です。今まで村が合併もなしに頑張ってきたのも、いろんな地域に負けない強みをみんなで磨いてきたからこそ。北山村というチームに少しでも貢献できるように、自分で勉強してきた観光の知識を少しでも生かしながら、村民全員で幸せになるための村づくりに関わっていきたいです。

西行法師生誕九百年に寄せて
～京都・東山　西行庵から紀州へ～

西行庵円位流当主
花輪竹峯

西行庵は、古い時代から今日に至るまで多くの皆さんを惹きつけてきた京都東山の麓にあって、西行法師の業績と心を伝える家です。近くには高台寺や八坂神社などがあって、昨今は外国人も加わり観光客で雑然としてはおりますが、表通りより一歩中へ入りますとかやぶき屋根と苔むした露地が侘びたたずまいの当庵に出合われることと存じます。

西行庵の始まりは佐藤義清が出家してほどなく営んだ蔡花園院で、『西行物語絵巻』は西行入寂の場所として伝えています。吉田兼好と並ぶ室町時代の和歌四天王で、当庵中興の祖とされる頓阿法師はここで西行150年遠忌を執行し、西行法師坐像をみずからお作りになられ、江戸中後期には冷泉為村卿が老朽化した庵の修復もなされ、幕末には日蓮宗より独立し本門佛立宗の開祖となる日扇上人が一時期住まわれるなど、幾人もの僧の方々によって祀られて参りました。

明治時代に入り、新政府の廃仏毀釈令により西行庵も荒廃の憂き目にあいますが、明治26年春、勧業万国博覧会が京都で開催されるのにともない、東山一帯の景観整備の一環として円山公園が整備されることになり、隣接する西行庵の再興が計画されます。その折、初代市長内貴甚三郎は富岡鉄斎に呼びかけて人材を集め、事業家・文化人として名高い宮田小文を庵主に決定し、同年11月に西行堂が再興されます。そして、大名茶人小堀遠州流の茶人として名を馳せた宮田小文が唯一弟子と認めたのが和歌山日高出身の牧野マツ(旧姓岩畑)でした。マツは再興後の二代庵主となりますが、子どもがなかったことから一番年下の妹ヒロエ(私の祖母)から養女(恵美子)を迎えて三代庵主とします。私はその長子です。

ところで、西行庵庵主の後継となることを私に決意させた出来事がありました。それは、当家の先祖、織豊時代の長束正家にかかわる系譜です。歴史家の奈良寿先生の研究によりますと、名物割高台茶碗所持者で知られる長束正家を四百年遡りますと佐藤義清の長男、隆聖に至るというのです(秋田県鹿角市文化財保護協会発行『上津野No. 18』より)。西行法師と花輪の家の深い縁を思わずにはおれませんでした。私の茶道修業は裏千家茶道師範の母のもとで始まりました、武家の末裔であることに鑑み藪内古流林蕉菴宗匠の門を叩き、香道を大和古流友常天眼斎御当主に師事して研さんに努め、西行の僧名にちなみ円位流茶道の家を名乗るようになりました。

伝高山右近好茶室　皆如庵

私の一日は、毎日早朝西行法師像を祀る茶室で献茶・献香を行うことから始まります。ご要望に応じて朝茶を催し、年に4回西行庵保存会の例会として茶会を開き、西行の命日にあたる旧暦の2月16日に合わせ西行忌茶会を催しています、西行忌茶会は明治の再興者小文法師が始めて以来130年以上続く歴史を誇る茶会で、その日は近畿地方を中心に各地から大勢の方々にお越しいただいております。

母屋浄妙庵広間にて

本年は西行法師生誕900年の特別な節目でございます。西行生誕の地・和歌山の皆様にはとりわけ特別な年であるかと存じます。和歌山と深く堅い縁で結ばれている当庵を知っていただき、ぜひ一度、お茶人はもちろん西行ファンの方々も御来庵いただきたいと思います。また、私自身、西行ゆかりの場所を和歌山県内をはじめ各地にお訪ねし、西行を偲ぶとともに、寺社等での献茶・献香さらには茶会を催す機会を得たいと願っております。茶湯、香、花、和歌、そして祈りを通じて西行の大和心を後世にお伝えする事が当庵の使命であると、鋭意精進してまいります。

流域に暮らす人びとの減災の思想
～熊野川流域に伝承する「上がり家」～

和歌山大学客員教授
鈴木裕範

水害碑のある祐川寺の石段左に上がり家

和歌山県立博物館が行っている「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」2017年度調査に参加し、6月から12月までの間に熊野川流域を訪ね、田辺市本宮町伏拝・請川と新宮市熊野川町能城・九重そして北山村大沼の5地区の人びとに話を聞いた。今回私に与えられた使命は、熊野川流域の大水害に関わる証言を得、流域に暮らす人びとの災害への備えと自然観を探ることが主題だった。そのなかで確認したのが、自主水防家屋「上がり家」である。

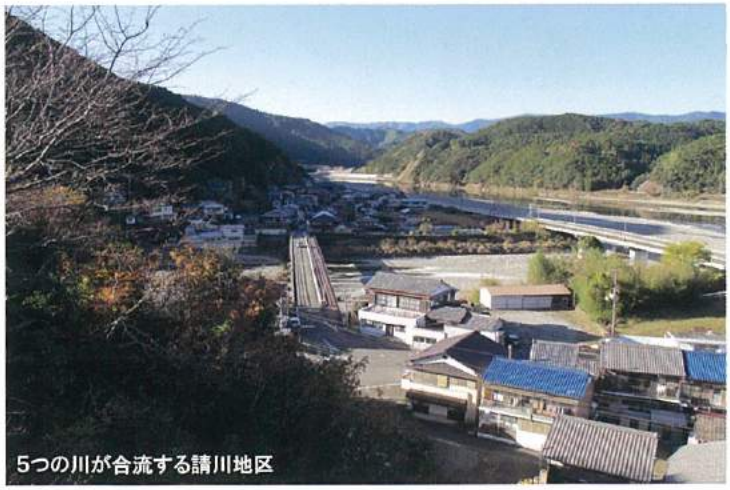
熊野川流域で記憶される主な巨大水害としては、近代以降では明治22(1889)年8月、昭和28(1953)年7月「28水害」、昭和34(1959)年9月伊勢湾台風、そして平成23(2011)年9月紀伊半島南部大水害があげられる。平成のそれは想像を絶する大洪水で、今後熊野川史上最大最悪の大水害となった明治の水害とともに語られていくにちがいない。

上がり家は、川がもつ両義性を受容するところから考え出された災害文化である。それらの家は、熊野川の本流域の低地で複数の河川が合流する地域で自宅とは別に自主的水防を目的にした家屋で、住居・店舗の奥のかさ上げした土地や高台を選んで建てられた。平屋建てと二階建てがあり、室内は一時的に人が暮らせる居住空間が確保され、台所・風呂場・トイレなどを備えている。この家屋はまた災害時には家族だけではなく親類・近隣住民の避難場所にも利用され、平常時は商業用倉庫、寝具、衣類など生活用品を保管する物置として活用されている。そして、所有者は主に商店の経営者であるのが特徴である。

台所、ふろ場なども備えた上がり家室内 本宮町萩

今回で確認した上がり家は、現存6軒、上がり家跡7軒の13軒である。それらのことは多くは「28水害」前後の体験とともに教えられた。熊野川町能城の2軒、本宮町請川の1軒はいまも活用され、本宮町萩地区の1軒は貸家として移住青年らに提供、再利用されている。上がり家は今日、過疎化・人口減少・少子高齢化の進行にともなう小売店の激減や1962年の洪水以後は、ダム放流量が浸水度を示す指標として住民に周知され避難判断基準の一つになり、公共の避難場所の設置が進んだことなどを背景に姿を消しつつある。

請川地区では、平成23年水害で洪水が激流となって襲ったが、流失家屋は1軒もなく、全員が無事だった。地区では各家が災害に備えて基礎の強化工事を施し、集会所そばには避難用ボートが常備されている。「上がり家」は消えつつあるが、水辺に暮らす人びとの減災の思想の精神は、形を変えてつながっている。


5つの川が合流する請川地区

最近、美浜町在住の民俗学者で元和歌山工業高等専門学校教授の吉川壽洋氏に、古座川町潤野周辺の上がり家の存在を教えられた。流域に生きる人びとの暮らしは、様々な形で、紀南地方の各河川に存在したことを知る。自然災害多発時代、その経験と知恵に学ぶことは多い。

世界農業遺産を学ぶ

みなべ・田辺世界農業遺産協議会は、世界農業遺産に認定された「みなべ・田辺の梅システム」を保全・活用・推進するため、マイスター養成事業の一環として和歌山大学と連携して、29年度に「世界農業遺産」を学ぶ授業を開講した。

授業は、世界農業遺産とは何かを現地でのフィールドワークを中心に学ぶのが特徴で、29年12月から30年2月の間に和歌山大学システム工学部をはじめ東京大学や京都産業大学の教員、梅農家や森林組合などの専門家を講師に行われ、一般社会人15人と大学生が受講、社会生態学的観点から田辺市やみなべ町の梅林などで400年にわたり高品質な梅を持続的に生産してきた農業システムの特徴などについて学んだ。

みなべ町森林組合・松本貢さんの講義

石神梅林での植生調査

熊野を学ぶ

和歌山大学南紀熊野サテライトの学部開放授業「熊野郷土学」が、平成29年度から新宮市で始まった。この授業は田辺市で行っているサテライト授業の新宮・東牟婁地域での開講を望む地元自治体や住民の声を受開かれることになったもので、教室となる会場は新宮信用金庫が地域貢献事業の一環として無償提供して実現した。

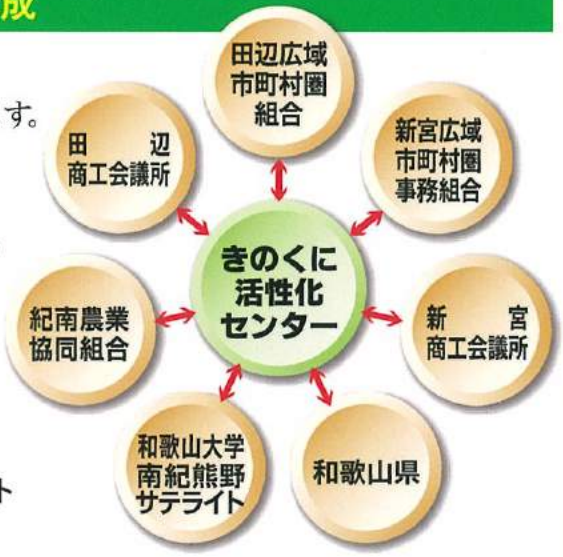
「熊野郷土学～郷土学からの地域振興～」は様々な専門分野から熊野地域の独自性や多様性について総合的に学んで活用し持続可能な地域振興と地域経営に生かしてもらうことを目的に、6月3日の第一回授業を皮切りに前期A、後期Bあわせて12回の授業が開講した。内容は災害、歴史、文化、産業、観光、地域振興、地域経営などで、地元の新宮市や東牟婁地方、熊野市などの広い地域から、公務員や会社員、経営者、高校生らが受講した。今年度の授業も、6月から始まった。

「紀伊半島の発酵食品産業」の授業風景

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
（2018年6月現在）

- ●田辺周辺広域市町村圏組合
- ●新宮周辺広域市町村圏事務組合
- ●田辺商工会議所
- ●新宮商工会議所
- ●紀南農業協同組合
- ●和歌山県
- ●和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

昨年度は予定していたNEWSをお届けすることが出来ず、申し訳ありませんでした。今年度から、役員・事務局体制が変わります。心機一転、精励する所存です。

ところで、ことしは紀州人西行法師が生まれて900年という節目の年に当たります。センターでは、先行して企画を進めていましたが、和歌山県立博物館の「西行展」と重なってしまいました。企画展にあわせて、西行学会が和歌山で初めて開かれる予定で、紀州では埋もれている紀州人西行にスポットが当たることが期待されます。これを追い風に、センターならではの「西行」を発信する予定です。みなさまのご支援、ご協力もよろしくお願いいたします。（す）